

## 清水建美先生 思い出の記

13日の金曜日

金井弘夫 (小金井市)

2002年9月13日は金曜日だった。長野県植物誌の刊行とCD-ROM詳細版の製作が一段落し、次にCD-ROM普及版の製作にかかろうとしていた。この機会に、資金援助をいただいたアボック社に御礼の挨拶をするため、12時に大船駅で清水さんと待ち合わせた。

詳細版CD-ROMでは、貴重植物の産地や位置座標がそのまま記録されており、これを不用意に一般向けに配布するわけにはゆかなかった。清水さんはその対策として、8桁の位置座標の末尾を削って6桁にする案を持っていて、文書の上では実際にそうしていたようだ。しかし私には、これは受け入れ難かった。プログラムの大幅な改訂が必要で、それに要する追加資金の見込みはなかったからだ。だから普及版では、貴重種の位置座標はその産地名ではなく、町村役場に当たるものを使っている。地図の表現にも不本意なところがあり、改善を申し入れたのだが「あの部分は利用無料のサブプログラムを使っており、ご希望を満たすためには、有料のサブプログラムを使わねばならない」と言われてあきらめた。その他にもいろいろな注文を通してもらうために、マニュアルの製作費をそれらに廻し、私がマニュアル(使用説明書)を書くことになっていたのである。

時刻になっても彼は現れず、松本へ電話して彼の事故のことを知ったことは、本誌36号(2003年)に書いたので省く。

彼の入院先は、お茶の水駅の近くだったので、時々様子を見に行った。和美夫人は近くに月極めマンションを確保して、いつも枕頭に立っていた。清水さんはやがて意識を取り戻し、私が行けば弱々しくだが、挨拶するようになった。私についての彼の記憶は、失われていないようだったが、さりとて話しを続けられるような状態ではなかった。リハビリの訓練が早くも始まっていて、病室へ戻るとクタクタだと、奥さんは言っていた。普及版の製作に、前記のような問題があることを知らせてあったので、彼が経費獲得に、なにか工作をしている可能性があった。でもこの期におよんで、彼にそんなことを尋ねるわけにはゆかない。奥さんに「こういう訳で、なにかそれらしい連絡や通知があれば、知らせてほし

い」と声をかけた。彼女は背中を向けたまま、俄に咳き込んだ。「生死の境目にいる人を前に、金の話を持ち出すなんて...」と気分を害したことは明らかで、「済みません。私、風邪気味で...」と、かろうじて答えただけだった。でもその後、そんな通信を受け取ったら、気付いて知らせてくれただろうから、そういうことは無かったのだと思う。

彼は地下鉄大手町駅で発症し、救急車で日大病院へ運ばれた。もしかするとその間に、なにか言い残してはいないだろうか？大手町駅の構内は複雑で、私は行くたびに方角がわからなくなる。おまけにプラットフォームには、駅員の姿がない。あちこち歩き回ったあげく、駅長室へたどりついた。彼は、何やら分からない激しい頭痛に襲われながら、駅員を探したことだろう。「貴方の坐っているところが、彼が坐っていたところですよ」とのことだった。彼がなにか言葉を残したかどうか、その内容などは、肉親以外の人には話せない...とのことだった。救急隊へも行ってみたが、答えは同じだった。

彼は松本へ戻るとすぐに、詳細な自分誌(清水建美年譜 一植物分類学者の歩み)を作って、みんなに配布した。こういうものは、本人の死後に、後輩たちが作るのが通例だが、彼は長野県植物研究史を編むのに苦労した体験から、「厚かましい」と言われようと、一番よく知っている自分自身が、成功も失敗も、良いことも悪いことも含めて、残しておくという選択をしたに違いない。彼の年賀状に毎年添えられていた詩文が、和美夫人の作品であることを私が知ったのは、この資料のためである。夜明け前の薄明を思わせるような短文の雰囲気、文章は忘れてしまっても、記憶に残っている。

植物学者であり私たちの指導者であった清水建美先生を悼む

松田行雄 (松本市)

2002年9月脳内出血で倒れ入院されたが、退院後はリハビリを積極的に行い植物研究に打ち込まれ、多くの研究物を残されました。最近体力が衰え、奥様の献身的な介護を受けられましたが、2014年11月に12年間にわたる長い闘病生活のすえ逝去されました。ここに長野県植物研究グループ各位に代わり、心から先生のご冥福をお祈りいたします。

清水先生が信州大学に在籍し教鞭をとられ、退官後も長野県植物研究会の進展に尽力されました。その一部である「長野県植物誌」作成に関わられた様子を紹介させていただきます。先生は1960年に信州大学繊維学部に着任。その後信州大学教養学部へ異動されると同時に、1967年に長野県植物研究会を設立され、研究会の目標を「裏日本植物の研究」としたところ、多数の県内外の植物同好者賛同し参加されました。1975年植物研究会の設立10周年記念行事で「長野県植物誌」作成が提案され、賛成者により植物誌編纂委員会が結成されました。委員長に奥原弘人先生が選出され、植物誌には作成委員が各地に出向いて、生育している植物を必ず採集し、標本とすることなどが話し合われました。1977年に奥原先生が高齢で退任された後、清水先生が委員長となりました。植物研究に素人の私たちは両先生から植物標本の作り方、記録のとり方、植物の同定方法など多くを学ばせてもらいました。先生は、1988年5月から1997年3月まで金沢大学理学部へ異動されましたが、その間も先生からはニュースレターで植物誌作成の進捗状況や原稿作成の問題点などの連絡を頂きました。その結果、1997年「長野県植物誌」が出版されました。清水先生は、「皆さんが研究者として使命を感じていたからこそ、やり遂げられた仕事だと思う」とねぎらいの言葉をかけてくださいました。その後は金井弘夫先生の全面的なご協力をいただき、2003年「長野県植物誌資料集 CD-ROM」が出版されました。

清水先生が中心になって編纂された「長野県植物誌」や「長野県植物誌資料集 CD-ROM」は、地方の植物誌として他府県に誇れる植物誌となりました。出版できたのは会員の努力に加え、金井先生のご協力がいただけた結果で、心から感謝申し上げます。

終わりになりますが植物誌や植物誌資料集の編纂事業に参加させていただき、勉強をさせていただいたことに感謝いたします。ありがとうございました。

#### 清水建美先生の思い出

林 一六(筑波大学名誉教授)

清水建美先生は、保育社の原色植物図鑑で有名な京都大学の北村四郎教授のもとで、植物分類学を学ばれました。その後、信州大学の繊維学部、教養部、金沢大学において植物分類学の教育・研究生活をおくられました。先生は研究だけでなく、一般の人々

への植物学教育にも熱心で、長野県の植物研究者とも親しくまじわり、長野県植物研究会を組織され、長野県の自然保護活動を推進しました。とくに晩年の大著「長野県植物誌」の編纂にはその研究会の会員が大きな役割を果たしました。

先生にはじめてお目にかかったのは、先生が信州大学繊維学部の時代に、私が菅平にある東京教育大学高原生物実験所に着任してからでした。そのころの一番の思い出は、当時、先生が会長をしていた長野県植物研究会のメンバーと行った菅平高原にある湿原の植物調査です。その結果は「菅平湿原の植物生態 I: 植物社会」として、東京教育大学(現筑波大学)の菅平高原生物実験所研究報告第3号(1969)の11-28ページに印刷されました。そのときの著者は、浅野一男、林一六、平林国男、伊藤静夫、中山冽、清水建美、土田勝義の面々でした。調査は浅野さん、平林さん、中山さん、伊藤さんが専門としていた植物社会学派の方法で行いました。この報告には、植物群落の組成表と植生図がついていて本格的な論文でした。報告は「I: 植物社会」となっていますが、その後2002年にIIの「群落構造」が長野県植物研究会誌35号に発表されました。ここでは、前報告で「オオカサスゲ」とされていた種が「カサスゲ」と訂正されています。その調査の後、清水先生は湿原にあったアザミ類のうちからヤチアザミ(*Cirsium shinanense* T. Shimizu)を新種として報告しました。この種は日本固有種で基準標本は菅平となっています。

先生は人々にたいして、だれにでも公平に接してください、駆け出しの未熟で生意気な私にたいしても寛容で、いろいろ教えてくださいました。ヤチアザミの新種発表のときに菅平湿原の標本をとるようにわたしに命じましたが、私の標本の作り方が下手(押し方が足りない)で、結局ご自身でつくられました。

思えば、先生の思い出はつきません。研究のために訪れた博物館への途中で倒れられ、その後の闘病のち逝去されたと伺っております。長野県の植物学研究に巨大な足跡を残しました。ご冥福を祈るのみです。合掌。

2015年2月27日

#### 清水先生の二、三の思い出

和田 清(長野市)

清水建美先生の業績は計り知れない。あれだけの

お仕事をいつ、どのようにして成し遂げられたのだろう。まったく敬服するばかりである。

金沢大学の学生実習に、信大の志賀施設で一晩お付き合いたことがあった。朝、何台かの車に分乗して金沢を立ち、途中で調査、観察をしながら夕方に志賀高原へ集まった。ところが、清水先生の車は夕食時間になっても到着しない。後にユニークな地下部の図鑑を出版されたが、その資料を暗くなるまで収集して来たのだという。そのうえ夜更けまで、学生ゼミを開いて指導されていた。

長野県植物誌の作成には殊のほか尽力された。大勢のスタッフの取りまとめだけでも大変なことであった。金井弘夫先生とデータのコンピュータ化で、画期的な地方植物誌となった。あれだけの大物学者のこと、金沢大学の定年退職を待って引き手数多かったにちがいない。それなのに、清水先生は植物誌編集だけに専念された。出版元の担当者、大森さんは清水先生が退職後も植物誌の編さんに専ら取り組んでくださるよう、金沢まで出かけて懇願されたのだという。

信毎賞のブロンズ像は清水先生のお宅に預かっていただいたが、これを気に掛けていたようである。もう長いこと飾ったのでどこか他へ移してほしいと奥様から電話があり、植物標本庫の信大理学部が適当だろうと交渉してもらった。快諾を得たので清水先生のお宅へ受け取りに行ったとき、毎週末は一時退院して自宅で過ごすことなど、日ごろのようすを奥様がいろいろと話してくださった。これまで各地の標本庫から借り出していた腊葉標本の検索を先日やっと終え、すべて返却できたのでこれで一安心ですと言われた奥様だったが、それも最後となってしまった。

なお、この週末の送り迎えなどは、会員の竹田正博さんが献身的に介添えを支えていた。清水先生の近況や奥様までが病に倒れ、先立たれたこと等々、すべて竹田さんからの情報だった。清水先生にはお世話になり放しでお別れしてしまったが、竹田さんに全部代行してもらった思いで感謝している。

#### 清水建美先生の思い出

上田勝義（信州大学名誉教授）

清水建美先生が長いご療養の末、亡くなられたことに深く哀悼の意を表します。本当にご苦勞様でしたと申し上げます。

私が清水先生と初めてお会いしたのは、昭和 43

年です。この時私は信州大学文理学部の生物教室卒業後、4 年間研究生として教室に残って植物生態学の勉強をしておりました。そんな時、教養部の生物教室主任の助教授であった清水先生から、前任の方が辞められたあとの生物学の実習助手にお誘いを受け勤めることになりました。当時生物教室には動物学の吉田利男先生が講師でおられました。それから 9 年間生物教室にお世話になりました。私の主な仕事は生物実習の手伝いと、当時でも膨大な植物標本を持っていた植物標本室の管理でした。もう一つは設立間もない長野県植物研究会の事務局をマネージすることでした。なおのちに正式の助手にさせていただきました。そういう状況の中で、私は清水先生に直接研究上のご指導を受けたわけではありませんが、学問に対する厳しい態度、植物標本への畏敬、また先生の几帳面な生き方、何事にも情熱をもって向かっていかれるチャレンジ精神、また植物を学ぶ人たちへの親切丁寧なご教示など、接していくうちに学者中の学者であると深く尊敬するようになりました。それは業績にも現れ、わずか 30 台後半で教授に昇進されましたが、これは当時異例な事でした。私は標本室の植物標本の整理をしていたおかげで植物の分類にはかなりの知識を得ましたが、清水先生のご専門の植物分類学にはあまり興味がなく、当時千葉大学の沼田真先生から草原生態学のご指導を受けて美ヶ原、霧ヶ峰などにフィールドをもって草原の研究をしておりました。ただ私が植物分類学の研究をしたいといえ、親身になって教えていただいたと思います。

もう一つ、大きな問題に遭遇することになります。それは研究には相当ブレーキとなったと思われますが、昭和 45 年ころ、美ヶ原高原に観光道路ビーナスラインが霧ヶ峰の延長で建設されることがわかり、それに対して地元で美ヶ原の自然を守る松本市民の会が結成され、その会長に清水先生がなられ先頭に立って建設反対運動をされたことです。当時大学の先生が市民を率いて活動されたことはマスコミにも話題となりました。いま美ヶ原の台上にビーナスラインがないのは清水先生のおかげでもあります。そういう面でも清水先生は非常にリベラルな方でした。一方清水先生は謹厳な方で少し近寄りがたい感じでしたが、ある年、イギリスに留学が決まったときは、時々口笛を吹かれていたので驚いたこともあります。私は 10 年目に環境科学研究室の講師に採用されたので清水先生や、植物研究会の事務局（豊国秀夫先生に引き継ぎ）とも疎遠となりました。

が、清水先生の研究に対する真摯なお姿を傍ですっと見聞きし、また諸事大変お世話になったおかげでその後の私の研究生生活があったと深く感謝いたします。もっとたくさん書きたいことがあります但紙数の都合で割愛させていただきました。

教え頂いたこと

伊藤静夫（長野市）

私の大切にしているノートに「植物誌」（個人用）があります。野外で採集した植物を記録したノートです。長野県植物研究会（1968）が菅平高原の大洞川湿原で植生調査をした記録があります。調査仲間で話題になったアザミがありました。ノートにアザミ sp と記載してあります。調査で種名が分からない植物は、清水先生に直接お聞きするか、標本を送って後日先生から同定結果の連絡を受けておりました。アザミ sp は調査の期間中は種が同定されず保留となっております。

第21回の植物研究会例会（1970）で、清水先生は1968年に菅平高原の大洞川湿原の未同定のアザミ sp をヤチアザミ *Cirsium shinanense* T.Shimizu と命名されました。新種ヤチアザミは日本産アザミの分類、ヤチアザミの形態、分布、生活型等を検討されて命名されました。

植物研究会の野外観察会で種名が分からない植物を、先生にお聞きすると直ぐには答えずルーペで葉、茎、花の形態を丹念に観察してから「○○です」と教えて頂きました。先生が植物を同定する際に、紐のついたルーペで観察していた姿が印象に残っています。先生に接しているなかで、個々の植物を大事にされていること、植物全体を丁寧に観察すること、分類は植物を寄せ集めると、同じにならないもの（形質の違い）が出てくること、そこで分ける（分類することになるなど、分類の基本的な考え方を教えて頂きました。心残りは勤務の関係で、「長野県植物誌」編纂事業に関わりが浅かったことです。自分が内地留学する際に、国立科学博物館の小山博滋博士を紹介頂き、分類を勉強する機会を得させて頂きました。先生が病に倒れからはお会いする機会もなく、受けた御恩に対して、感謝の言葉すらも述べる事が出来ませんでした。そのことがずっと心に残ったままです。先生のご葬儀の日に遺影に拝礼して、御恩に深く感謝しました。現在、私は長野県環境保全研究所で標本作成のボランティアをおります。標本に接するたびに、分類を大切にされていた

先生の姿勢が思い起こされます。合掌。

「長野県植物誌」の立案に関わって

横内文人（松本市）

昭和52年（1977年）8月28日、この日に私は南佐久郡川上村にいました。前夜に恒例の採集会のため、旅館へ集合しました。例会の幹事は中山湧先生でした。夕食の後、清水先生から、「長野県植物誌」の構想が出されました。調査計画、12分担区域の予算・責任者、参加者、採集計画等が話し合われました。県への調査補助金の申請についても話し合われました。

私は清水先生から、「明日、残って一緒に種類を作って」と言われました。翌朝、清水先生と私は、中山先生の勤務する川上第2小学校へ向かいしました。中山先生が校舎の裏へ回って、鍵を開ける間に校舎南側を見回りました。兎小屋がありました。小屋の中に何匹かの兎がいました。餌に大きなニンジンが投げ込まれていました。太さ10cmもあろうかと思うものが5、6本でした。全然噛ってありません。毎日のように立派なニンジンが与えられるので、兎も食欲がなかったのでしょう。さすが高原野菜の産地です。

会議室をお借りして、筆記用具一式を揃えてもらいました。清水先生と話し合いながら、種類を作りました。中山先生は、私たち2人を置いて、採集会に行く予定でしたが、書類作りを2人に任せるのは気の毒といって残ってくれました。昼食は旅館で頂いたお握りを左手に持ちながら、書類を作りました。複写機をお借りして仕上げました。午後3時に書類が完成しました。学校からの帰り道で、白菜の取り入れをしている農家の方を見つけました。お願いして白菜を4個ゆずってもらいました。清水先生と2個ずつお土産にしました。とても大きくて立派なものでした。ダンボール箱入り4個で1000円でした。これがこの採集会の植物記録でした。構想から20年で、「長野県植物誌」（1997）が発行になりました。

清水先生のお昼寝

川上 美保子（上田市）

清水先生に初めてお会いしたのは1997年8月5日。先生が金沢から帰られて間もなくのことでした。「ヤア」と挨拶されつつ車から降りた先生は、長靴と作業着と腰にはよく洗濯された日本手拭…という

ファッション。図鑑などの著者紹介にあるお洒落な姿とは少し違って、驚いたことが思い出にあります。その年の春、植物調査をするには大いに力不足の私に村誌作成のため大岡村へ通って欲しいと依頼がありました。どのように準備するのかと迷っているうちに聖山スキー場増設工事が慌ただしく企画されました。清水先生は大岡村の求めに応じ、自然保護の見地からと予定地内の高等植物相の緊急調査を決めました。さっそく開始した調査は標本作成をしながら実施、3回目が済んだ初秋には工事が開始されました。翌年の春、作成した植物標本を基に村全体の特徴ある植物の標本を作成したいという意向が示され、調査が再開されました。

退官されても大切な仕事が山のようにあったはずの先生でしたが、3年の間いつも心よく大岡村まで車を向けてくださいました。調査は清水先生を先頭に村の担当者と時折学生も参加して、聖山・犀川・芦沼池などを歩きました。「国内新産か」と一時は思ったミドリヒメザゼンソウ。池の端にわずかにあった葉の正体を求め、ザブザブと池を半周し発見したミツガシワの大群落。池の水打ち際に群生するミズニラやミズユキノシタなど数多くの種が確認出来ました。標本は586種で現在は長野市立博物館に保管。標本目録は長野県植物研究会誌36号に掲載。

清水先生と歩く調査中、植物生態や植物生活史のことなど解り易く教えて頂いたことは種名を知ること以上に幸せなことでした。「清水先生は明治時代の文豪のよう…」と評した折に「明治時代は合っているけれど…」と照れていた清水先生。明治時代は認めた姿勢に、研究者として守っていた崇高なものがあるように思っています。横浜に住むお孫さんの



写真：大岡村芦沼池にて  
筑波大学院生と共に1998年10月

こと、出産のため帰省している娘と孫が三部屋も占領していて驚いたことなど、野外だから出来る雑談に先生の穏やかな家庭人の様子が想われ良い思い出を頂きました。調査員が少ない昼時は、雑草の上にゴロリと横になってお昼寝の清水先生。長年の緊張を解くひとときではなかったでしょうか。

#### ホザキシオガマと出会い

白井伸和（金沢市）

金沢大学に教授として赴任されてからは、地域のシンボリックな存在でもある白山の高山植物の研究に、研究室ぐるみで取り組むことになりました。学内での超多忙な日々の中で、白山登山は先生にとって何よりの楽しみだったのではないかと思います。

1993年8月、先生と私も含め学生二人が同行して、白山山系の一つ三ノ峰に登った時のこと、標高1600m付近にさしかかると右手に剣ヶ岩と呼ばれている大きな岩があり、岩の壁面にはたくさんの高山植物が咲き乱れていました。岩場に登るのは危険なので先生には下で待っていただくことにして、私が岩場の探索に行くことになりました。足場に気をつけながら岩場をよじ登っていくと、草つきの中に見慣れないシオガマギクの仲間が数株咲いています。そのうちの一株を採集して下りました。「先生、このシオガマ何でしょう？」と言って手渡すと、先生はいつも持ち歩いているルーペをとりだしてじっと見つめていましたが、ほどなく「これ、新種やぞ」



写真：白山のホザキシオガマ

と一言、そして満面の笑みをうかべて採集品を返されました。「どや、該当するものがあるか?」、最初は冗談かと思いましたが、先生の頭の中には日本産のシオガマグキ属のすべてが記憶されており、瞬時に照合されたのでしょう。後日の研究のため、標本にして大切に持ち帰ることにしました。

この植物は先生の教え子で現在熊本大学准教授の藤井紀行氏によって研究が続けられ、近年、DNAの分析などから中国大陸に分布する *Pedicularis spicata* ホザキシオガマと同一種であることがわかりました。

#### 清水先生と植物の生活史研究

千葉悟志（市立大町山岳博物館）

清水先生は、1998年9月13日に「日本産草本植物の生活史研究プロジェクト」の趣意書をお仲間や研究に関心のある方々にお送りし、有志を募られました。当時、面識のない私にも「植物の生活史について研究をしてみないか」とお声をかけてくださいました。うれしく、感激したことを今でも覚えています。先生のお書きになられた趣意書の一部を抜粋してご紹介させていただきます。

「ある植物をとりあげたとき、普通の図鑑や解説書では分からないし、記述のない生物学的に重要な事柄がまだまだ無数にあることを、私は近頃特に実感しています。事実、ごく身近な野草ですら習性（一年草、越年草、二年草、多年草）、根や地下茎の形など重要な生物的事項が意外に観察されていませんし、図鑑などでこのような記述をみることはまれです。しかも、これらの事柄は、十分ルーペひとつで観察できる事柄です。そこで、このプロジェクトでは草本植物を対象（木本では一生が長すぎる）に、新しいデータに基づく新しい日本産草本植物誌を作ること为目标とします。」

先生は、現在出版されている図鑑や解説書に物足りなさを感じておられ、自然史の研究や自然の仕組みの理解のためには生活史や生物間関係をあらわすことが欠かせないとお考え、新しい視点からの図鑑を作ること为目标にしておられたと思われます。参加者は県内外から20名程度あり、成果は年2回の研究会や長野県植物研究会誌に発表されました。先生は精力的にこのプロジェクトを推進されておられましたが、突然の病でお体をご不自由になられてからは、私が事務局を担当させていただきました。

実際に観察を始めてみると、植物体の部位を正確

に把握・理解することができず、先生の著書「日本草本植物根系図説」や「図説 植物用語事典」を片手に、頭を抱えながら観察を行いました。ときには、先生に直接ご指導を仰ぎたく、自生地での観察の帰りに、ご自宅へ寄らせていただきました。午前5時という早朝にもかかわらず迎え入れていただき、丁寧にご指導いただきました。奥様には温かいお茶とお菓子をいただきました。そのような温かいご指導をいただきながら、徐々に観察した植物数も増え、2007年と2011年には、当館の企画展「くさばなの一生」としてご紹介させていただきました。2～3年後には、先生が建設にご尽力された白山高山植物研究施設から譲り受けた種子や実生をもとにした高山植物の生活史をご紹介する予定となっております。しかし、先生の目標とされた「日本産草本植物誌を作る」には、近づけておりません。

このように、出来の悪い私にお声をかけていただいたことに心より感謝申しあげるとともに、先生にはまだまだお聞きしたいことがたくさんあり、ご指導していただけないことが残念でなりません。今後も先生が掲げた目標に近づけるように、植物生活史の研究を進めるとともに、地域の子どもたちに自然の面白さ、生き物と生き物の関係のふしぎについて伝え続けていきたいと思ひます。

先生のご冥福を心よりお祈り申しあげます。

#### 清水建美先生の思い出

竹田正博（安曇野市）

清水建美先生は、1997年（平成9年）金沢大学を退官されて松本に戻られてからも、白山高山植物馴化試験、長野県植物誌・同資料集の編集、長野県版レッドデータブックの作成、日本産草本植物生活史研究プロジェクトなど多くの事業・研究に携わり、多忙な日々を過ごされておりました。その多くが研究者や行政を相手とする仕事でしたが、一般の植物愛好家を対象にしたユニークな活動が「信州植物調査ハイキング」でした。ちょうど長野県版レッドデータブックの作成と重なる時期で、未確認種や最近の記録がない種などを調査対象として活動されておりました。草の上で車座になっておむすびを食べながら「ヌクレオチドの塩基配列を調べれば・・・」などとお話しされていたことを思い出します。活動範囲は長野県全域に及び、6年間で19回の調査をされました。第20回目の調査を白馬村遠見尾根で計画していた矢先の2002年9月に東京で倒れられ、活

動休止となってしまいました。

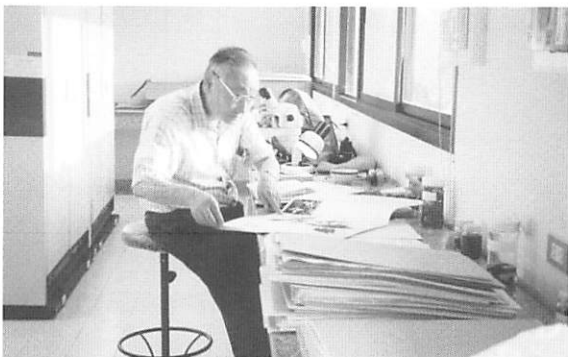
長い入院とリハビリを経て自宅療養に戻られましたが、半側空間無視などの後遺症が残り、昔のことは驚くほど鮮明に記憶されている一方、比較的最近習得されたパソコン操作がごちなくなり、不自由な生活を余儀なくされていました。思い通りに活動できないなかで、ご自身の年譜をまとめたり、海外の標本庫（L:オランダ・ライデン国立民族学博物館、AAU:デンマーク・オーフス大学、BKF:タイ・林野庁植物標本館、QBG:タイ・クイーンシリキット植物園など）から借用した標本を同定、返却されたりしました。こうした仕事の陰には奥様の献身的な介護がありました。

2004年にはDr.Suksathanと共著でタイのツリフネソウ属の新種3種（*Impatiens tribounii*, *I. phahonrpokensis*, *I. phengkklai*）を発表されました。最初の種は、お世話になったタイへの感謝の気持ちを込めて、シリキット王妃の名前に因んで *I. sirikitae* の名を献上したいと強く希望されていましたが、王室からの承認に時間がかかることから断念せざるを得なくなり、大変残念がられていました。

2006年第14回松下幸之助花の万博記念賞受賞の頃より次第に歩行困難となり、車椅子を使う生活



写真：お花見・奥様と2007年4月15日



写真：タイ・チェンマイ QBG 標本庫にて2001年

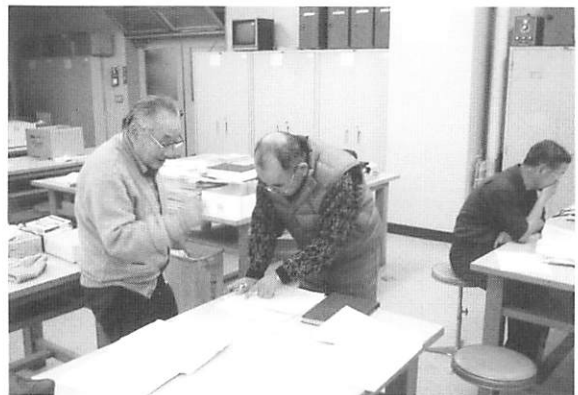
になりました。2008年3月に松本文化会館で行われた長野県植物研究会40周年記念大会には、当日の朝まで出席を希望されていましたが、体調がすぐれず断念されました。同年、奥様の入院手術を機に介護施設に入所され、奥様の退院以降も施設での生活が続きました。2014年5月に突然奥様が亡くなられ、半年後に先生も後を追うように亡くなられました。白峰で出会われたという観音様のお導きで、彼の地の花園をお二人で巡られていることと思います。

最後に、長い間家族同然に先生を支えてこられた中垣明子さんのことを一言添えておきます。

#### 清水先生と植物標本庫（SHIN）

大塚孝一（長野市）

私が長野県植物研究会に入会したのは、1972年で大学3年生のことでした。その頃シダ植物を調べていて、信州大学教養部の植物標本庫（SHIN）に良く通いました。金沢大学植物分類学講座に行っただけからにはさらに植物標本調べを重視し、全国の主要な大学・博物館等の標本庫を訪れました。分類学では標本調査がとても重要でしたから、多くの標本が蓄積される植物標本庫の重要性を清水建美先生は深く認識され、信州大学教養部植物標本庫を創設されました。以後、「長野県植物誌」の刊行に向けて、さらに植物標本の充実を図られました。現在、信州大学自然科学館にあり、標本数約30万点を所蔵しています。SHINは全国の著名な標本庫と肩を並べるように、標本チェックにかならず訪れる箇所にもなっています。私が勤務する長野県環境保全研究所植物標本庫（NAC）には約20万点弱の標本が収蔵されていますが、SHINともども長野県の貴重な自



写真：長野県植物誌の資料集編纂・信大にて

清水先生左、中山湧先生中、横内文人先生右  
2001.12.14



写真：新種発表したヤチアザミの標本  
(TNS295734)

然史資料として研究に供されれば幸いです。

信大標本庫の場所は幾度か移動してきました。最初は生物学教室事務室隣、次に教養部事務局近く、次に赤れんがの別棟、ついで自然科学館として現在に至っているかと思います。標本庫に歴史があるように、植物分類を担当された先生方も、清水先生、豊国秀夫先生、井上健先生、菅原敬先生、そして佐藤利幸先生に受け継がれています。植物標本に基づき「長野県植物誌」、「長野県植物誌資料集 CD-ROM」が出版されたことは、ひとえに清水先生のお力によっています。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

#### 菅平湿原の調査

浅野一男（町田市）

清水建美先生のご逝去を心からお悔やみ申し上げます。

長野県植物研究会は1968年、69年両年度の行事として菅平湿原植生をとりあげて調査した。菅平湿原は、クロビイタヤ、シバタカエデ、ハナヒョウタンボク、エゾサンザシ、シキンカラマツなどの稀産種を有することによって、そのフロラの特徴は古くから注目されてきたが、湿原植生についての研究は乏しく、植物社会学的見地からの総合的な調査研究は、堀正一（生態学研究 11: 22-26 (1948)）以外には知られていなかった。そこで長野県植物研究会は本湿原について、現存植生の解明、植生図の作成、遷移と環境要因、クロビイタヤなど特殊植物の分布状況を課題として総合調査を行った。

初年度の調査は9月に2回、70方形区を設けて実施した。第1回は9月6～8日、浅野一男、伊藤静夫、清沢晴親、清水建美、高見沢誠、土田勝義、寺島虎男、中山洸、林一六、平林国男、松田行雄の11名が参加し、大洞川の中下流を調査した。第2回は9月22～23日、浅野、伊藤、土田、林の4名が参加し、大洞川上流を含め補充調査を行った。1968年の報告では菅平湿原の植生分類を中心に述べ、日本各地から報告されている湿原の組成との比較を通して、この湿原の群落的位置づけを試みた。報文の作成に当たっては、まず外業によって得た資料の取りまとめを、浅野、伊藤、中山、平林が担当し、執筆は主に浅野が、植生図の作成は中山が担当した。できた原稿は伊藤、清水、土田、中山、林、平林の6名が補筆訂正を行い、浅野が最終稿を作成した。この調査では、各層の出現種について、Braun-Blanquetの優占度の総合判定法と群度の測定など生態調査法の再確認ができて有意義であった。また、清水先生からはフロラに関する興味深いお話が聞け、宿舎での夜業も楽しいのもであった。